

連載 館長のつれづれだより

特集1 没後60年 北大路魯山人 古典復興
—現代陶芸をひらく—

特集2 豊福亮「パラチバ」

ボランティア日和

【イベント報告】 わくわく親子デー
ナイトミュージアム☆ヨガ

美術館の仕事を紹介します!
「その5 広報の仕事②」



北大路魯山人《染付葡萄文鉢》1941(昭和16)年 世田谷美術館(塩田コレクション)



館長のつれづれだより 魯山人とイサム・ノグチ

北大路魯山人の作品を、ある程度まとまった数、展示する展覧会を見ることが出来たのはわたしにとって久しぶりのことでした。魯山人の名前や作品、魯山人が関係した料理店「星岡茶寮」の名は、祖父母や両親を通して、10代の終わりころには見知っていました。陶芸家としての魯山人の作品を意識的に見たのは、鎌倉の鶴岡八幡宮の境内にあった神奈川県立近代美術館であったと記憶しています。「鎌近(かまきん)」の略称で親しまれ、1960年代前半に美術史を学んだ学生にとっては欠くことの出来ない重要な存在であり、知識と情報の宝庫、近代・現代美術の聖地の感がありました。1960年代の後半には、畏友酒井忠康君がすでにそこに、勤務し始めており、彼を訪ねた折などに、魯山人の作品にも触れ、魯山人についての話も鎌近の学芸員の先生方から拝聴したのです。そのようなときに、イサム・ノグチが、北鎌倉にあった魯山人所有の純日本式の家屋

に居を構え、新婚早々の山口淑子と住み、和服を着る生活を常とし、アトリエを構え、土による制作を行ったことも知りました。

わたしたちが卒業した慶應義塾の三田キャンパスには、ノグチが室内の設計をした建物(2003年解体撤去・一部保存移設)やそれと特別な関係性をもつ野外彫刻があり、長いこと親しく接していたので、イサム・ノグチと北大路魯山人という、稀有な芸術的個性に恵まれ、数奇な生い立ちに伴う数々のエピソードをもち、普通人を超える強烈な生涯を送った二人の芸術家には、断続的ながら興味と関心を、わたしは持ち続けてきました。

1996年の夏に、その二人を結ぶ展覧会が、酒井君の鎌近で開催されたのです。その展覧会図録で酒井君は、「二人の出会いには、まさに洋の東西の芸術文化を集約するもっとも上質な一面を交錯させると同時に、強靱な意思を貫いた二人の人と思想の内なる激突を物語る一面をも潜伏させており

ます」と述べています。二人の交遊、両者の間の相互交流は、彼らの芸術創作に、わたしたちが想像する以上に大きなものをもたらしたにちがひありません。

酒井君はまた「ノグチのなかに培ってきた『個』というものを、自分だけのものとするのではなく、『衆』に徹したところに開示する、という思想の具体的な『場』の設営となった」とも言っています。この分野の論評に関して門外漢、正直に言って素人です。しかし、この言葉は、わたしがノグチや魯山人を理解しようとするためには有効でした。

稚拙な表現で、十分な分析は出来ませんが、日本画家を志すものの、書家として早く名を上げ、一方、幼いころから食べることに関心が高く、料理の感覚を磨き、その料理を盛り付けるに相応しい食器を揃えるために、自ら作陶を行うに至ったというのが、魯山人という優れて個性的な陶芸家の誕生やその背景が語られる時に、しばしば耳にすることです。

魯山人は、「食器は料理の女房」とか「食器は料理の着物」などとも言っています。料理を介しての「美の生活の探求」、それが、魯山人が経営した「星岡茶寮」の理念でした。いま風の言い方をすれば、「生活の中に常に美をも求める」こと。つまり料理を供する場や時のそれぞれに応じ、食器にとどまらず、説える調度品を含めて、そこに美的な空間を創造することであり、魯山人という卓越した総合芸術家もそこにこそ生れたのでしよう。

「北大路魯山人 古典復興 —現代陶芸をひらく—」展は、魯山人の作品のみでなく、彼が学んだ古典となった作品、交流を重ね交互にさまざまなかたちで触発しあった作家たちの作品も併せて展示することで、魯山人芸術の本質やいまに息づくその魅力を知る機会を、わたしに改めて与えてくれました。鑑賞者の皆様にも存分にお楽しみ頂けることを願っております。

〔館長 河合正朝〕

没後60年

2019年

北大路 魯山人

古典復興 現代陶芸をひらく

7月2日(火) ————— 8月25日(日)

Kitaoji Rosanjin—The Renaissance of Japanese Ceramics: The Path to Contemporary Art



【図1】 北大路魯山人《赤志野茶碗》1945-59(昭和20-34年) 世田谷美術館(塩田コレクション)

——まずは開催の経緯を教えてください。

じつは、この美術館ができたところに、一度話があったんです。けれどその頃は、魯山人という「古い人」というイメージがあり、なんとなく立ち消えになってしまったんですね。ただその後、わたし自身がいろいろな展覧会を担当したり、近代美術と現代美術の違いを考えたりするなかで、魯山人は単なる古い人ではなく、非常に今日的な問題を含んだ人なんだ、というイメージができあがってきたんです。

——具体的にどのようにしてできあがったのでしょうか。

日本における立体造形の流れを考えていたとき、方広寺の大仏を造った人物に関する記録がほとんど残っていないことに気づいたんですね。あの当時、秀吉のことだから腕利きの職人を集めたはずなのに、名前が出てこない。そこで、はたと思っただけです。運慶快慶以後、日本人にとっての立体造形って、彫刻からやきもの取って代わったのではないかと。鎌倉時代に禅宗とともにお茶が広まっていき、仏像に代わるものとして、茶碗が非常に抽象的な存在として定着していったのではないかと考えたんです。

しかし、安土桃山時代に花開いたやきものは、江戸時代になると芸術から産業へと変化します。それと、表層的なテクニックや技巧を重視するようになり、立体造形としての本質みたいなものが忘れられてしまうんです。そのまま時は明治になり、ここで大きな揺り戻しが起こります。代々のやきもの作りの家だけではなく、純粋に美的な興味を持った人たちが関わってくるんですね。たとえば富本憲吉、河井寛次郎、そして北大路魯山人。なかでも魯山人という人は、日本のやきもの力強さを見出した先駆者だったんだろうな、と感じたんです。

——この変遷をひとつの展覧会にまとめるのはむずかしそうです。

悩むところはあったのですが、魯山人だけではなく、魯山人を追いかかっていたような人たちも巻き込み、また、魯山人が見たであろう古いやきものや近い作品をあわせて展示することで、魯山人が生きた時代を再構成することを試みました。だから、今回の展覧会の英文タイトルは“The Renaissance of Japanese Ceramics: The Path to Contemporary Art”なんです。

——タイトルの話になったのでお聞きしたいのですが、「古典復興」とはどういった意味を持つのでしょうか。

たとえば、「ものあはれ」は、ものがあわれな状態にあることではなく、ものをあわれと思う心の動きです。それとおなじように、古典復興は、古典の精神をいかに感じるかという、作り手側の問題なんです。古典復興の重要性は、失われた技法を再現することではなく、古典に対してどう向き合いどう反応していくか、ということにあります。魯山人をはじめとする今回の出品作家の多くは、このことにしっかりと向き合っていたんですね。くわえて彼らには共通点がある。みんな、専門的な学校を出ていないんです。魯山人も川喜田半泥子も、荒川豊蔵も。加藤土師萌は例外で、やきもの学校の助手をしていましたが、これも正規の教育とはちょっとちがう。このことがなにを意味しているかという、つまり、彼らにとっては「古典」が「学校」だったんです。

——古いやきものから学びを得ていたんですね。しかし魯山人は、ロク口をさわるのが嫌いだっただけですが……。

魯山人は、ロク口をさわるのが嫌いだっただけですが……。

魯山人の没後に、関係者が回想のなかでそう言っています。ベタベタしたものは、生理的に苦手だったらしい。だから、魯山人がやきものに惹かれた理由のひとつは、作る楽しみではなく、料理に関係する部分だったのだらうと思います。自分の料理を盛りつけるためのやきもの。それは、演繹していくと、空間という総合芸術の一步としてのやきものに結びつきます。書家だったころに、建物の内装を自分の考える中国趣味に統一する仕事もしており、空間を作るということをかなり早い段階から考えていたようです。俺の力でこの空間を変えてやる、というひりつくような意思が、魯山人にはあったんじゃないかと思えます。

——実際にどのように料理が盛られていたか、知りたい気持ちが湧いてきます。

当時、魯山人がこういうものを盛り付けています、という資料はあまり出ていません。いまでは雑誌などで魯山人のうつわに料理を盛りつけた写真がよく載っていますが、あれは魯山人の晩年から始まったイメージなんです。というのも、戦後、主婦の家事の量や質が変化し、「教養としての和食」というものが出てきます。担い手は、『きょうの料理』のようなテキスト教材や、婦人雑誌などでした。そのなかで、辻嘉一という懐石料理の名手が活躍するのですが、この辻さんが、魯山人のうつわを尊敬して自分の料理を盛りつけたんです。このことは、魯山人のイメージの確立に、意外なほどに影響を与えました。

——たしかに、魯山人と聞いて一般的に思い浮かべられるイメージは、婦人雑誌に出ているような写真が多いかもしれません。

それでは最後に、今回の展示の見どころをお聞かせください。

今回は、名古屋の八勝館さんをはじめ、中京地区の美術館や博物館の協力を全面的に受けています。じつは、中京地区の美術品を数多く関東に持ってくることは、あまりなかったらしいんです。日本の古い美術といたら、名古屋を飛ばして京都に行ってしまうじゃないですか。でも、中京にはしっかりと「蔵の深さ」があって、驚きました。パン1台で3日間、愛知を中心に所蔵先をまわり、中国の古いやきものから安土桃山時代のやきものまで、よくもまあこれだけの名品を借りたなあ、と思います。中京地区に点在するやきもの、そのさわりだけでも持ってこられたのはよかったですね。

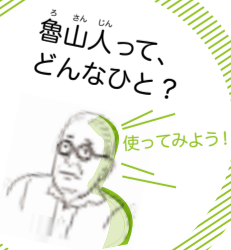
——いち押しの作品はありますか。

《赤志野茶碗》【図1】かな。音楽の表現技法のひとつに、複数の楽曲の要素を複合させ1つの楽曲に仕上げる「マッシュアップ」という技法があります。半泥子にしろ、魯山人にしろ、マッシュアップなんですよ。《赤志野茶碗》でいえば、全体のなりは朝鮮半島の《熊川茶碗》【図2】から来ていますが、釉薬は志野なんです。《粉引茶碗 銘「たつた川」》【図3】はもっとわかりやすく、白化粧の「粉引」という技法は朝鮮半島のもですが、描かれているのはまさに日本の伝統的な意匠。どちらも朝鮮半島と日本のマッシュアップです。伝統を自在に編集しマッシュアップすることは、じつは20世紀のモダニズムの精神なんです。それを期せずしてやっているところが、おもしろい。解説のなかにもマッシュアップという言葉が出てくるのですが、他館の学芸員から「こんなカタカナいるんですか?」と言われ、「絶対に使ってください」と頼みました(笑)。

【話し手 上席学芸員 藁科英也】

もっと楽しくなるガイド

来館者の方が、もっと展示を理解したり、楽しんでもらうために、セルフガイドを制作しました。対象は小学校高学年から。もちろん大人の方にもご利用いただけます。受付にて貸出中です。



【図2】 朝鮮 高麗茶碗《熊川茶碗》17C(朝鮮王朝時代) 愛知県美術館(木村定三コレクション)



【図3】 川喜田半泥子《粉引茶碗 銘「たつた川」》1945-54年(昭和20年代) 石水博物館



△ 街の上にはミニ四駆のコースがしきつめられています

トヨ フク リョウ
豊福亮

「パラチバ」

道を作り、夢の家やお城を建てて、
パラレル・チバタウンを作り出そう！

2019年7月13日(土)～8月25日(日) 休館日：8月5日(月)

●開館時間：10:00～18:00 (金・土曜日は20:00まで) ●観覧料：無料 ●会場：1階プロジェクトルーム
リニューアルにともない、2020年7月、美術館4階にアーティストとつくる子どものための創造的な空間「つくりかけラボ」がオープンします。そのプレ企画として、1階プロジェクトルームにおいて行われている豊福亮による「パラチバ」プロジェクト。美術館のなかにパラレル・チバタウンを作り出すという、子供心くすぐる予測不可能な企画の様子をレポートします。



△ パラチバはとってもカラフルな街



△ ゴムをかきわけて通るまんまるゲート



△ みなさんの参加で街がどんどん変化しています！

「パラチバ」のイベント

公開制作

7月13日(土)、7月14日(日)、7月15日(月・祝)

アーティストトーク

7月15日(月・祝)、8月24日(土) 各日14:00～

オープンワークショップ

ワークショップ①「パラチバもりあげ隊☆」
7月16日(火)以降、会期中いつでも
ワークショップ②「あったらいい設計図」
7月16日(火)以降、会期中いつでも
ワークショップ③「つくるのはおまかせあれ!」
7月21、28日(日)、8月10日(土)、11日(日)
開催時間：10:30～15:00(受付は14:00まで)

地域連携プロジェクト

「パラチバ」の素材となるものを千葉の街の皆さんから集め、アーティストやワークショップ参加者によって街の一部に作り変えられます！



△「あったらいい設計図」はいつでも募集中!



△ 設計図を具現化するワークショップを開催!



△ 設計図をもとに、こんな作品ができあがりました!



展示は8月25日(日)まで続きます。会期中いつでも参加可能なワークショップも開催しています。ぜひ「パラチバ」に遊びにきてください!

ボランティア日和

皆さまは「ゾーンに入る」という経験をしたことがあるでしょうか。よくアスリートについて使われる言葉ですが、最近私はそのような状態を意識することがあります。

人に注目されると過度にあがってしまい、話をまとめられず、生来人前で発表することが苦手だった私は、先輩方のようなギャラリートークは到底できないのではと気が重くなっていました。

昨冬の「1968年 激動の時代の芸術」展のトークについても、興味の範囲が広すぎて收拾できずに悩んでいました。しかしある日、喫茶店で田名網敬一の画集を広げてその半生について文字を追っていたとき、作家が目にし

ている情景が脳裏に浮かび、するすると自分に入っていくのを感じたのです。それからはトークの内容をポスター画中心で行こう、という軸ができました。

ギャラリートーク当日も、一字一句話すことを原稿にしたためたわけではないのに、作品が語りかけてきて、後押しされているような感覚がありました。視界が広い状態ではないけれど、その場に集中できている。また、緊張感はあるが、うろたえることはない。幼少期のピアノ発表会や学生時代の能楽の発表会の時の感覚を思い出しました。

浮世絵も日本画も現代美術のアーティストも、特別なのではなく、我々と同じ空気を吸う地続きの世界にいる



のだということ、親しみやすくお伝えするというのをモットーに、ボランティア活動に向かっています。

ゾーンとまで言わなくとも、鑑賞教育の子どもたちや、来館者のみなさまにも、作品が語りかけてくるような感覚を味わっていただく、そのお手伝いができれば幸いです。

[美術館ボランティア 忠隈 瑞穂子]

REPORT わくわく親子デー



6月15日(土)に、「板橋区美×千葉市美 日本美術コレクション展 一夢のCHITABASHI美術館!」会場の内外で、恒例となりつつある「わくわく親子デー」を開催しました。今年は「夢のポケットづくり」「ドリームコインをみつけよう!」「お気楽♪ ギャラリーツアー」の3つの企画を中心に、子どもから大人まで楽しめるプログラムを実施しました。あいにくの雨模様でしたが、たくさんのお子様たち、そして大人たち楽しんでいただけたのではないかと思います! また来年も開催予定ですので、ぜひお越しください。



REPORT ナイトミュージアム☆ヨガ

【講師】亀井光恵(ヨガインストラクター)

6月21日(金) 19:00~21:00 / 7階展示室にて開催

夜間の美術館を楽しむナイトプログラムとして、「ナイトミュージアム☆ヨガ」を開催しました。展示室という静かで落ち着いた空間は、ヨガにぴったり。作品の呼吸が聞こえてきそうです。初心者にもやさしい座ってできるヨガで、みなさんじっくりと体を動かしていました。



美術館の仕事を紹介します!

その5 広報の仕事②

前回(90号)からひきつづき、広報のお話。今回はインターネットを使った、ホームページについてのお話です。

美術館に行って、展覧会を見て、ワークショップやイベントに参加して……。そんな体験の思い出にチラシやチケットの半券を保管しておいたり、それをあとでたまに見返したりしている方も少なくないのではないのでしょうか。逆にかさばって場所をとるものがお好きではないという方もいると思います。

一方、インターネット上にある情報には、かたちがありません。アップロードされた情報

は、端末があればどこでも見られますが、物があるわけではないので個人の手元には残りません。かたちで残らないものだからこそできる自由なフットワークの軽さが特徴です。

ホームページでは展覧会の他にも、講演会やワークショップ、イベントや学校とのプロジェクト、刊行物などの情報を発信しています。

「何を、どこで、いつやるの?」「次の展覧会はなんだろう?」そんな疑問もPCやスマートフォンなどの端末を使えば、いつでもどこにいたって調べられるのが特徴です。1ページに入る内容は(ほぼ)無制限。画像の大きさ、数、

文字量も思いのままです。本当はお知らせしたかったけれど、スペースなどの関係で泣く泣く省いた詳細な情報を削らずそのままお知らせできるのです。

展覧会を紹介するページでは、会場内で配布している出品目録を公開したり、広報機関向けのプレスリリースを公開したりすることで、それがどんな展覧会なのかを丁寧に紹介しています。講演会やワークショップの申し込みなどもホームページ上のフォームを利用して手軽にできるようになっています。

イベントのページではいろいろな催し物の

詳細を、決まり次第どんどん追加しています。

そして来年のリニューアルオープン控え、ホームページもリニューアルの予定です。デザインも新しくなり、コンテンツの数も種類も増えていくので楽しみに。

さらにwebでの広報はTwitterなどのSNSもあわせて展開していきます。

もっと便利に、わかりやすく。たくさんの方にお届けすることで、美術館を手軽に身近なものとして知っていただけたら嬉しいです。

【広報担当 池田陽子】



現在の千葉市美術館ホームページ



ホームページ更新作業中の画面より